

津波に関するシンポジウム

ーリスク情報を活用した耐津波設計の実践による継続的な安全性の向上ー

パネルディスカッション討論概要

<討論の論点>

- 論点 1. 福島第一事故後の7年半の、事故の教訓を踏まえた津波への取り組みに関する現状と将来展望は？
- ✓ 事故の教訓は反映、実現されているか？ 未だ残されている課題は？
 - ✓ 現状と目指すべき姿の差はどこにあるのか？
 - ✓ いつまでにどのようにしてその課題を克服するか？
- 論点 2. 津波に対する新知見の取り込みや研究/技術開発、継続的安全性向上は、今後どのように行われていくべきなのか？それに対する課題は？
- 論点 3. 以上を踏まえて、各学協会の規格基準策定の今後の取り組みは？
- ✓ 誰が何をいつまでに実施するか？

<討論概要>

ー論点 1ー

座長より、現状として、福島第一事故以降「日本原子力学会の津波 PRA 標準、日本電気協会の耐津波設計規程の策定などの取り組み」と「津波に関するWGによる提言」があったことが確認された後、パネリストより、津波 PRA の活用のメリット（弱点の把握とメリハリのついた対応）が紹介され、「今は PRA 評価手法の成熟を待つ姿勢からの脱却が必要であり、PRA を使いこなす時期に来ている」というコメントがあった。

将来展望として、「耐津波設計と津波 PRA とをつなぐプロセスの構築が必要であり、抜けをなくすためにも、PRA の実務では設計側の協力も不可欠である」との意見があった。座長から、各パネリストに対し“不確実さ”の使い方についての確認があり、“不確実さ”を含んだ事案を RIDM で判断する際の工夫（第3者の視点、SSHAC（Senior Seismic Hazard analysis committee）、判断後の継続的なモニタリング）について紹介があった。また、耐津波設計では、津波によるプラントへの影響の複雑さゆえに、「全体のシステムが所定の目標を達成していることの評価を行い、全体のバランスをとる必要がある、今まで以上に耐津波設計と PRA に関連する学協会が真摯に協力し合わなければならない」との提言があった。

ー論点 2ー

座長より、新知見について、「文献調査等で見つけるような受け身の姿勢ではなく、研究・技術開発等の新しい考え方を取り込むという積極的な姿勢により得られるものではないのか」という問題提起がなされ、各パネリストに対して新知見に関する意見の確認があり、理学的な新知見をハザードとして取り込む際には、発生の頻度や対策に係る時間やコストを考慮し、受け取る側が責任を持って判断すべき」というコメントがあった。

また、「継続的安全性向上には、新知見、新技術、気付いていなかったことなどの適切な反映による安全性のステップアップが必要」「そのようなプロセスを廻していく、柔軟かつ積極的な体制と仕組み（モチベーション維持とインセンティブ）が基盤になる」との議論があった。

ー論点 3ー

規格基準策定のための今後の取り組みとして、「学協会を越えた議論をする枠組みの構築が必要である」「設計とリスク評価をつなげるツールの開発が必要」などの意見があった。

最後に座長から討論のまとめがあった。

以 上